

冒険教育プログラム体験による大学生の社会人基礎力の変容に関する研究  
 ～達成動機との関連に着目して～  
 白倉 久嗣 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)  
 指導教員 林 綾子

キーワード：冒険教育プログラム，社会人基礎力，達成動機

1. 序論

社会人基礎力とは、前に踏み出す力（アクション）、考え抜く力（シンキング）、チームで働く力（チームワーク）の3つの能力（12の能力要素）で構成されており、「職場や地域社会の中で多様な人々と共に仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」（経済産業省,2012）のことである。青木ら（2012）は、キャンプ体験は、前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力の社会人基礎力を構成する一部の能力に教育効果があると述べている。

筆者は、社会人基礎力を育む場として、冒険教育プログラムに着目し、また強い達成動機を持って取り組むことが、より効果的と考えた。

そこで本研究では、冒険教育プログラム体験による大学生の社会人基礎力の変容を明らかにすること、また社会人基礎力と達成動機との関連を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

【対象者】B 大学野外スポーツコースに所属し、夏の専門実習参加者の内、不備のあった1名を除く31名を対象とした(有効回答率96.9%)。

【調査時期】社会人基礎力の調査は、3因子34項目からなる「社会人基礎力評価シート」を用いた。達成動機の調査は、堀野（1987）が作成した「達成動機測定尺度」を参考に、筆者が修正し、「ふりかえりシート」として行った。また「社会人基礎力の活用についてのアンケート」を作成し、プログラム1ヶ月後に使用した。各調査時期について以下の表1に記載する。

表1 調査時期

	実習2ヶ月前 (Pre1)	実習前日 (Pre2)	実習中	実習直後 (Post1)	実習1ヶ月後 (Post2)
社会人基礎力	○	○		○	○
ふりかえりシート			○※		
社会人基礎力の活用					○

※プログラム中毎日実施

3. 結果と考察

1) 社会人基礎力の変容

4回の得点の差を検討するため時期を要因とする1要因対応のある分散分析を行ったところ、有意な差があることが明らかとなったため、Bonferroni法を用いた多重比較を行った結果、プログラム後に有意な向上がみられた。またプログラム1ヶ月後において得点が維持されていた。3因子得点においても有意な差がみられ、1ヶ月後も得点が維持されていた。表2にそれらの結果を記載した。また下位因子である主体性、実行力、計画力、課題発見力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロールにおいてもプログラム前後で有意な向上がみられた。学生全体で様々なプログラムを達成することで社会人基礎力総合得点、因子得点、下位因子得点が向上したのではないかと考える。

表2 社会人基礎力総合得点、因子得点の変容

	M(SD)				F値
	Pre1	Pre2	Post1	Post2	
社会人基礎力総合得点	106.71(11.25)	108.58(11.25)	123.16(14.94)	123.45(14.12)	27.74**
アクション因子得点	21.61(3.24)	22.26(2.89)	26.00(3.56)	25.61(3.22)	24.14**
シンキング因子得点	25.13(4.49)	26.42(4.53)	29.94(5.04)	30.90(5.04)	14.53**
チームワーク因子得点	59.97(7.42)	59.94(7.34)	67.23(7.92)	66.94(6.81)	18.59**
					**p<.01

2) 達成動機の変容

「自己充實的達成動機」因子得点の変化を検討するため、時期を要因とする1要因対応のある分散分析で検定したところ、有意な差があることが明らかになった ( $f(3.51)=9.76, p<.01$ )。

また「競争的達成動機」因子得点も同様に検定したところ、有意な差があることが明らかになった ( $f(3.81)=14.55, p<.01$ )。従って Bonferroni法を用いた多重比較を行った結果、両動機において、最終日が全ての日と比べて、有意に向上していることが明らかになった ( $p<.01$ )。目標を掲げ、達成していったことが得点向上に繋がったのではないかと考える。

3) 社会人基礎力と達成動機の関連

社会人基礎力と達成動機の関係を見るために相関分析を行った。その結果、社会人基礎力と達成動機の間には有意な相関はみられなかった。一方で、自己充實的達成動機と競争的達成動機の間には、有意な正の相関がみられた ( $r=.465^{**}$ )。また自己充實的達成動機と達成度の間には有意な正の相関がみられた ( $r=.402^{*}$ )。

4. まとめ

冒険教育プログラムを体験することで、大学生の社会人基礎力、達成動機が向上することが明らかになった。また、プログラム1ヶ月後において社会人基礎力得点が維持されており、冒険教育プログラムで得られた社会人基礎力が日常生活で活かされることが明らかになった。社会人基礎力の能力要素である「チームワーク」は、向上が見られにくいものだとされていたが、本研究では他の能力と同じく向上していた。自主的に難易度の高い課題にチームで取り組み、達成する体験が社会人基礎力育成に効果的であることが明らかとなった。

本研究では、社会人基礎力と達成動機の関連を明らかにすることはできなかった。社会人基礎力と達成動機がどのような関係性を持ち、どのような要因が社会人基礎力と達成動機を向上させたのかを明らかにすることが今後の課題と言える。

引用文献

- 青木康太郎・粥川道子・杉岡品子(2012)キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果に関する研究.北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要,3:36.
- 堀野録(1987)達成動機の構成因子の分析・達成動機概念の再検討.教育心理学研究,35:148-154.
- 経済産業省(2012)社会人基礎力に関する研究会.https://www.iec.co.jp/sk1011/002.html (2014/12/16 アクセス)